

里山鳥獣らぼ活動紹介

落合 茉里奈（里山鳥獣らぼ）

はじめに

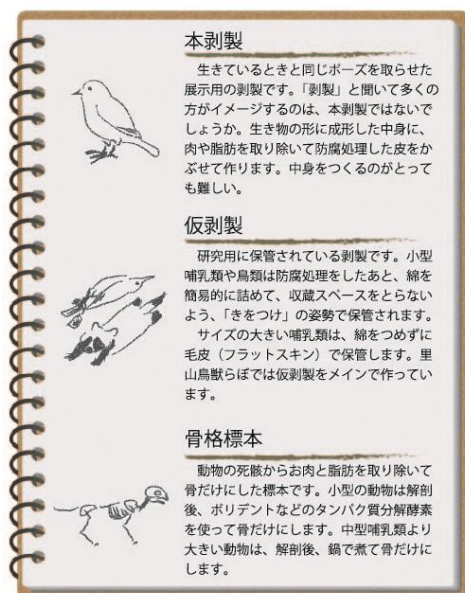
資料の収集・保管は博物館が担う重要な役割のひとつである。鳥類や哺乳類分野の標本については、バードストライクやロードキルによって死亡した動物を受け入れ、保存できる状態に処理をして保管している。しかし、鳥類・哺乳類は標本化するまでに時間と技術を必要とするため、館員だけで標本の登録を進めることが難しく、標本化が動物の受け入れペースに追いつかない状況になっていた。同様の課題を抱える博物館は多く、そういった館の中には、ボランティアグループの力を借りて動物の標本化を進めているところもある。

一方で、自然史分野に関心を持つ人から標本作製活動の場を求める声は多い。大阪市立自然史博物館では、「なにわホネホネ団」というボランティアグループが博物館に収める標本づくりを精力的に実施している。所属人数が延べ400人を超えることから、こういった活動に興味を持つ人が一定数おり、需要があることが伺える。

そこで、兵庫県立人と自然の博物館でもボランティア活動を通して標本づくりが進められないかと、「里山鳥獣らぼ」というグループをつくり、鳥類・哺乳類分野での標本作成活動を始めた。今回の共生のひろばでは、「里山鳥獣らぼ」の活動紹介のため、ポスター発表をおこなった。

活動内容

鳥類・哺乳類分野での標本は展示用の本剥製、研究・保管用の仮剥製という形式がある。本剥製は動物の皮を剥いだのち、皮に防腐処理をして、木毛などで作った中身に被せ、生きていた状態と同じような状態に成形するもので、仮剥製は防腐処理後にバックヤードでの保管用のために場所をとらないよう「気を付け」の姿勢で作られる。里山鳥獣らぼでは、主に仮剥製づくりをおこなっている。



仮剥製



翼の標本

標本の種類

「里山鳥獣らぼ」では、これまでにヒヨドリ 10羽、シロハラ 3羽、メジロ 3羽、ツグミ 2羽、イソヒヨドリ 2羽、コゲラ 2羽、スズメ 2羽、ムクドリ 1羽、ホオジロ 1羽、アオジ 1羽、アオゲラ 1羽の合計 28羽を仮剥製にした。また、体に破損のある個体については、翼のみ残す形で標本作製しており、これまでにホオジロ、カワセミ、メジロ、ドバトを 1羽ずつ翼標本にした。哺乳類については実施回数は少ないものの、骨格標本・毛皮の作製に着手している。

課題

動物の標本作製には怪我や感染症のリスクがあるため、メンバーを積極的に募集をしてこなかったこと、新型コロナウイルスの感染対策で 2 年ほど活動を停止していたことから、標本化のペースがなかなか上げられていないことが現在の課題である。今後は、自然史に興味のある方向けの場などで、里山鳥獣らぼの活動を発信していき、参加希望者を募りつつ、標本化作業を進めていきたい。

さいごに

里山鳥獣らぼは、facebook のグループページにて標本づくりの実施日をお知らせしています。ご興味のある方は、以下の QR コードからグループへの参加の申請をしてください。実施日はあまり安定していませんが、気軽に参加できる雰囲気です。ご参加お待ちしております。

※参加できるのは、刃物が扱える方・「見えない汚れ」が理解できる方に限ります。ご了承ください。

